

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 12 号

平成 26 年 4 月

聖心女子大学

は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条による公表を目的として、平成26（2014）年2月19日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第5条第1項（いわゆる課程博士）によるものであるものを示す。

氏 名	磯部 悠紀子 (いそべ ゆきこ)
学位の種類	博士 (文学)
学位記の番号	甲第26号
学位授与年月日	平成26 (2014) 年2月19日
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第5条第1項該当
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科
論文題目	ベルクソン哲学における「揺れ (oscillation)」 —持続との関連で見るその発展的機能—
論文審査委員	(主査) 教授 富原 眞 弓 (副査) 講師 上石 学 (副査) 講師 畑 浩一郎

博士学位論文の要旨

1. 問題と目的

本論は、アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) の四つの主著、『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』、*Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889)、『物質と記憶』(*Matière et mémoire*, 1896)、『創造的進化』(*L'évolution créatrice*, 1907)、『道徳と宗教の二源泉』(以下『二源泉』、*Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932) に散見される「揺れ (oscillation)」という語に注目し、著作ごとに変化するベルクソンの思想の流れを捉えて、一貫した観点から解明するものである。

「揺れ」の語はベルクソンの議論の核心的な箇所でも用いられている。しかし従来の研究の多くは、この点に明確には言及してこなかった。ベルクソン哲学の中心的概念で、時間経過の質的側面を意味する「持続」が、揺れという言葉の持つニュアンスとは相容れないと考えられ、揺れを追究すればベルクソン哲学の本質を見誤るおそれがあるとみなされてきたからである。

確かに持続は中心的概念であり、ベルクソンは自らの思想において常にこの概念に立ち返ってきた。しかしながらベルクソン哲学には、著作を追うごとに「持続」という語それ自体の現れる頻度が減少するという特徴がある。持続の概念は、まるで伏流水と化していくかのように、記憶や進化など他の諸概念に含意されるようになるからだ。したがって、持続という語のみを限定的に論じていては、四つの主著を一貫した観点から容易には理解することができない。

このような事態に対処しうる解釈の仕方を模索する中で、試みに「揺れ」という語に注目してみたところ、持続と相容れないように見える一方で、切り離しては考えられないほどに不可分な性質を持つことが分かった。この性質を利用すれば、『二源泉』に向かうにつれて徐々に姿を消していく持続の概念の痕跡を辿ることができるように思われた。そこで本論は、四つの主著の中で揺れの語が用いられている箇所を取りあげて読み込み、持続と揺れの関係のあり方が四つの主著を通して変化していくこと、両者を組み合わせた解釈はベルクソン哲学のさらなる理解の助けになりうることを明らかにする。本論を通して我々は、揺れに対する一義的でネガティブなイメージを払拭し、揺れは解釈上看過しえない重要な語であると示すことができるだろう。

2. 研究

本論は五つの章から成っている。第1章から第4章までの各章では、揺れのあり方を著作ごとに提示する。第5章ではそれらを踏まえて、揺れが解釈上意味を持つ語であることの証明を試みる。

第1章では『試論』における揺れを検討し、揺れの基本的な性質を確認する。『試論』には各章に揺れの語が見られることから、章ごとの比較を行う。第1節および第2節では、『試論』第1章の芸術作品の例と第2章の振り子の例をそれぞれ取りあげ、持続を妨げる揺れ、持続と両立する揺れという二つの側面を見出す。第3節では、『試論』第2章で挙げられている持続とメロディーのアナロジーの例に基づいてさらなる類推を行い、持続が揺れ

と不可分な関係にある可能性を示す。第4節では、『試論』第3章で論じられる自我の躊躇の例を用いて、持続と揺れとが共存しうることを示す。

第2章では『物質と記憶』における揺れを検討し、持続と揺れが徐々に結合し始める過程を見る。『物質と記憶』の中心的主題はベルクソン独自の二元論であり、揺れの語はそれについて詳述される箇所です。それゆえ、この二元論との関連づけによって揺れの意味を解釈する。第1節では、『物質と記憶』の議論を理解する鍵が精神と物質の接触の仕方の分析にあることを示唆する。第2節ではベルクソン独自の二元論について説明する。第3節ではその仕組みを参照しながら、一般観念の形成過程の説明に揺れの語が用いられていることを示し、精神と物質の接触の仕方が揺れによって表現されていることを明らかにする。第4節では、『物質と記憶』における持続と揺れの関係のあり方について論じ、揺れがまるで持続と一体であるかのような相を呈することを確認する。さらには『笑い』の中で揺れの語が見られる箇所をも引きながら、揺れの本質的なあり方を追究する。

第3章では『創造的進化』における揺れを検討し、持続と揺れの結びつきがやや強くなる過程を見る。『創造的進化』には四つの主著の中で最も多く揺れの語が見られるので、箇所を選択して議論を行う。第1節では、「生命の一側面としての知性」という論点が『創造的進化』までの三つの主著に共通して現れていること、この論点が『創造的進化』で表明されるベルクソンの進化論を基礎づけていることを見出す。第2節では、この論点を介して揺れについての考え方が共有されていることを示し、著作相互の関連性を浮かび上がらせる。第3節、第4節、第5節では、ベルクソンの進化論を参照しながら、種の分岐の形成過程の説明に揺れの語が見られることを踏まえ、揺れが持続とともに生命の進化の一端を担っていることを明らかにする。

第4章では『二源泉』における揺れを検討し、持続と揺れとがもはや分離不可能になる過程を見る。揺れの語は『二源泉』の最終章である第4章で特に用いられているので、それらを重点的に扱う。第1節では『二源泉』と『創造的進化』の対比から、進化についての社会的な観点と生物学的な観点との違いを明確にする。第2節では「閉じたもの」と「開いたもの」とをそれぞれ説明し、両者の区別をもとに『二源泉』で論じられる人間の進化の意味を確認する。第3節から第5節にかけては『二源泉』第4章で揺れの語が使われている三つの箇所をそれぞれ取りあげ、ベルクソンが振り子の揺れになぞらえる規則性的内容に沿って、閉じたものが開くことの意味を導き出すとともに、社会的な観点から見た進化において揺れが果たす役割を明らかにする。

第5章では、揺れが解釈上意味を持つ語であることを確かめるために、第4章までに行った議論を踏まえて既存のベルクソン研究との関連づけを実験的に試みる。第1節と第2節では、ドゥルーズの論文の要点を本論第1章から第4章までの内容と照らし合わせ、ドゥルーズの語る「差異」に揺れが内在することを明らかにする。第3節では、ベルクソンの複数の論文とそれに関する研究を参照しながら、持続との関係に四つの主著すべてを通して変化をもたらす揺れを、これまで論じられることの少なかった「流動的概念」の「媒介的イメージ」として解釈する道を開く。これらの関連づけにより、揺れに注目した解釈はベルクソンの外部にも開かれた論点であること、持続と揺れの関係のあり方の変化の意味は、ベルクソン哲学内部の概念によって理解可能になることを突き止める。

3. まとめ

以上の議論によって我々は、揺れが解釈上意味を持つ語であることを示すとともに、持続がベルクソン哲学を貫く概念であることをあらためて確認する。幾何学の問題を解く際に補助線を一本引くときのように、中心的概念である持続と併せて揺れに注目することで、本論はベルクソン哲学のさらなる解釈の可能性を提示することができるだろう。

L' « oscillation » chez Bergson : Sa fonction évolutive par rapport à la durée

Résumé

Cette étude propose une interprétation de la philosophie de Henri Bergson (1859-1941) à travers l' « oscillation ». Dans ses quatre livres principaux, à savoir *Essai sur les données immédiates de la conscience* (1889), *Matière et mémoire* (1896), *L'évolution créatrice* (1907) et *Les deux sources de la morale et de la religion* (1932), Bergson a parfois utilisé le mot oscillation, y compris le verbe osciller, dans quelques passages importants. Les études bergsoniennes ne menaient pas bien une recherche approfondie sur ce mot, car d'après leurs auteurs, la nuance matérielle de l'oscillation aurait pu provoquer une interprétation imprécise de l'essence de la philosophie de Bergson, fondée principalement sur la notion de « durée ». Certes, la durée est la notion centrale de Bergson, et il y est toujours revenu au cours de son itinéraire. Pourtant, on n'a jamais approfondi l'oscillation d'une manière pertinente. Pourrait-on vraiment dire que la recherche sur l'oscillation provoquerait la méprise de l'essence du bergsonisme ? Pour répondre à cette question, notre étude envisage d'interpréter des passages où se trouve mentionnée l'oscillation à travers les quatre livres principaux, de montrer le sens de l'oscillation par rapport à la durée, et de présenter une interprétation possible de l'oscillation sans perdre l'essence de la philosophie de Bergson.

Le premier chapitre examine l'oscillations dans *l'Essai* et précise son caractère fondamental. Nous trouvons d'abord deux aspects de l'oscillation, d'un côté incompatible, de l'autre compatible avec la durée. Ensuite nous parlons de la possibilité d'une relation inséparable entre la durée et l'oscillation, et enfin nous prouvons cette possibilité.

Le deuxième chapitre se concentre sur l'oscillation dans *Matière et mémoire* et en donne une interprétation selon le dualisme original de Bergson. Nous commençons par montrer la clé pour comprendre *Matière et mémoire*. D'après le dualisme de Bergson, elle consiste à analyser la condition de contact entre l'esprit et la matière. Il nous semble que cette condition est représentée dans l'oscillation, par l'intermédiaire de la durée. Ainsi traitons-nous de la relation entre la durée et l'oscillation dans *Matière et mémoire*. A la fin de ce deuxième chapitre, nous pouvons voir l'oscillation sembler faire corps avec la durée.

Le troisième chapitre examine l'oscillation dans *L'évolution créatrice* et précise ce qu'elle signifie en se basant sur la théorie originale de l'évolution de Bergson. Selon lui, les évolutionnistes pensent que l'intelligence est la force la plus puissante et qu'elle comprend la vie. Pour réfuter leurs idées, il a développé sa théorie, car, selon lui, c'est la vie qui comprend l'intelligence. Notre tentative dans ce chapitre est donc d'éclairer la richesse de la vie en utilisant la relation entre la durée et l'oscillation. La théorie de Bergson nous permettra de dire que non seulement la durée mais aussi l'oscillation fonctionne dans l'évolution de la vie sans qu'elles s'opposent.

Le quatrième chapitre parle de l'oscillation dans *Les deux sources*, surtout dans son quatrième et dernier chapitre, et détermine le sens de l'oscillation selon la théorie de l'évolu-

tion sociale de Bergson établie sous l'analyse du « clos » et de l' « ouvert ». En expliquant le mécanisme construit entre le clos et l'ouvert, nous rendons claire que la théorie de l'évolution sociale de Bergson s'inspire du mouvement du pendule, c'est-à-dire de l'oscillation. A travers sa théorie, la durée et l'oscillation vont offrir un aspect caractéristique comme si elles n'étaient plus séparables.

Le cinquième chapitre tente de prouver que nos arguments concernant l'oscillation ne sont pas valables que pour nos problèmes, avec l'article de Gilles Deleuze intitulé « La conception de la différence chez Bergson » et deux articles de Bergson, à savoir « Introduction à la métaphysique » et « L'intuition philosophique ». Nous essayons d'ouvrir un chemin pour comprendre le changement de la relation entre la durée et l'oscillation observé par nos quatre chapitres. Cela nous fera découvrir que les arguments sur l'interprétation de l'oscillation sont bien applicables à l'extérieur de la pensée bergsonienne en liaison avec certaines notions chez Bergson.

De cette manière, notre étude montre que l'oscillation est un mot significatif pour l'interprétation de la philosophie de Bergson. Comme nos chapitres le vérifient, la fonction de l'oscillation évolue autour de la durée. Ainsi, bien loin que l'oscillation cause l'interprétation imprécise du bergsonisme, elle propose un moyen pour mieux l'approfondir.

学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 磯部 悠紀子

論文題目 ベルクソン哲学における「揺れ (oscillation)」
—持続との関連で見るその発展的機能—

審査委員 主査：富原 眞弓
副査：上石 学
副査：畑 浩一郎

1. 論文の要旨

アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) の四冊の主要著作、『意識に直接与えられたものについての試論』(1889年、以下『試論』)、『物質と記憶』(1896年)、『創造的進化』(1907年)、『道徳と宗教の二源泉』(1941年、以下『二源泉』)には「揺れ oscillation」という語が散見される。従来、「持続 durée」の概念を中心に「質的生成」を追究するベルクソン哲学の本質が、「揺れ」という語に含意される即物的なニュアンスによって損なわれるのではないかとの危懼から、研究者のあいだにはこの語の追究を躊躇する傾向があった。本研究では、四冊の主要著作を通観する視点に立って「揺れ」の語が出現する箇所を解釈を行ない、「揺れ」の意味を「持続」との関係において提示しつつ、「揺れ」はベルクソン哲学の本質を損なうどころか、さらなる理解を深める一助となりうることを明らかにする。

第1章では『試論』の各章における「揺れ」を検討し、「揺れ」の基本的な性質を確認する。第1節および第2節では「oscillation」の語義とベルクソンの主張内容との齟齬に注目し、『試論』第1章の芸術作品の例と第2章の振り子の例を扱う。規則正しく往復して「持続」を妨げる「揺れ」の性質が示されるほかに、「質的生成」の一環として「持続」と両立する「揺れ」の性質も想定されうることを明らかにし、「揺れ」の有する二つの側面を指摘する。第3節では『試論』第2章の「持続」と旋律との類比に基づき、「揺れ」に含意される二側面を統合する観点を導きだし、「持続」と「揺れ」が不可分な関係にあると推測する。第4節では自我の躊躇の例を用いて第3節での推測を裏づけ、「持続」と「揺れ」の共存可能性を示す。

第2章では『物質と記憶』における「揺れ」を検討し、ベルクソン独自の二元論に沿って「揺れ」の意味を解釈する。第1節では『物質と記憶』と『試論』の連動性を確認し、『物質と記憶』においても『試論』から導かれた「揺れ」の性質を追究しうると判断する。第2節では精神と物質の接点を固定させずに動きを与えるベルクソンの二元論の仕組を説明する。第3節ではその仕組を参照しつつ、精神と物質のあいだのやりとりが「揺れ」によって表現されること、『物質と記憶』における「揺れ」がベルクソンの議論の核心と密接に関わることを明確にする。第4節では上記の特徴を有する「揺れ」と「持続」の関係について論じ、「揺れ」が「持続」と一体であるかのごとき相を呈することを確認する。

第3章では『創造的進化』における「揺れ」を検討し、機械論的進化論への異議申立である「生命の一側面としての知性」というベルクソンの構想に依拠しつつ、進化論との関

連において「揺れ」の意味を解釈する。第1節では『創造的進化』と『試論』および『物質と記憶』との繋がりに注目し、『創造的進化』においても「揺れ」の議論を継続可能であると判断する。第2節では「生命の一側面としての知性」の構想がすでに『試論』や『物質と記憶』でも認められることを明らかにし、著作相互の関連性を顕在化させるべく試みる。

第4章では「閉じたもの le clos」と「開いたもの l'ouvert」の対概念を措定する『二源泉』の新たな視座に着目し、ベルクソンの社会的進化論に即して「揺れ」の意味を解釈する。第1節では『二源泉』と『創造的進化』との繋がりを検討し、「揺れ」の議論を継続しうることを確認する。第2節では「閉じたものが開く」と表現される社会的進化の意味について論じ、第3節から第5節にかけては『二源泉』で集中的に「揺れ」の語が用いられている第4章から3箇所を取りあげ、ベルクソンが振り子の「揺れ」になぞらえる規則性を分析し、閉じたものが開くことの意味を導きだし、社会的な観点から捉えられる進化において、「持続」と「揺れ」がもはや分離不可能な様相を呈することを結論づける。

第5章では、上記の議論を踏まえてベルクソン哲学の内外の論点と「揺れ」との繋がりを実験的に構築し、「揺れ」に注目した議論の汎用性を検証する。第1節と第2節ではドゥルーズの論文「ベルクソンにおける差異の概念」の要点を本論第1章から第4章までの内容と照合し、「揺れ」の語を含む引用箇所がドゥルーズの「差異」の潜在的な基礎づけである可能性を示す。第3節ではベルクソンの二つの論文「形而上学入門」と「哲学的直観」、およびそれらに関連する研究論文を参照し、「持続」と「揺れ」の関係性の変移を「流動的概念」と「媒介的イメージ」との組合せによって解釈する道を開く。かくて、「揺れ」に注目した解釈はベルクソンの外部にも開かれた論点であり、ベルクソン哲学の概念とも連携することが示唆される。

本論文は以上の議論によって「揺れ」がベルクソン哲学を解釈する構成要因たりうることを証明し、「質的生成」を担保する「持続」の概念を核として構成されるベルクソン哲学の本質を損なうどころか、むしろその理解を深める手段を提供するものであることを導きだしたといえる。

2. 本論文の評価

本論文で第一に評価すべきは、従来、包括的に考察されることの少なかった「揺れ」の構成的機能に着目し、ベルクソン哲学の鍵概念である「持続」との有機的な連携を浮き彫りにし、「持続」の本質をなす「質的变化」を「揺れ」と関連づけて例証したことである。ときに伏流水と化して表舞台から消えるかのごとき印象を与えがちだった「持続」の概念を、四冊の主要著作をつらぬく通奏低音とみなす可能性を示唆した。本論文による「揺れ」の構成的機能の再発見は、近年、国内外で著しく活発化しているベルクソン哲学の再評価に資するものであり、高い学問的価値を有すると思われる。

第二に、第一章から第四章までベルクソンの四冊の主要著作を丹念に精読し、一見して方法論も主題も問題意識も異なる四冊の主要著作に通底する導きの糸を析出したにとどまらず、あえて第五章であらたに「流動的概念」と「媒介的イメージ」という異質の概念を導入し、先行四章の論調とは異なる論述を果敢に試み、本論文がより射程の長い研究へと発展する可能性をも示唆した。

第三に、緻密で丁寧なテキスト解釈、明晰かつ抑制的に叙述する言語運用能力、論旨を明確に提示する構成力など、総合的な能力に裏打ちされた真摯で誠実な研究姿勢は高く評価できる。また、最終試験の質疑応答および第3回審査委員会での口頭諮問での落ち着いた対応は、慎重に言葉を選びながらも説得力があり、研究者としての広汎で確かな知見を窺わせるものとして評価された。

3. 本論文の審査の過程

本論文は、2013年10月30日に提出された。同年11月1日に学長より博士学位申請論文審査の付託がなされ、同年11月12日、大学院委員会承認による3名からなる審査委員会が設置され、すみやかに審査を開始した。2014年1月22日には、博士学位申請論文最終試験および最終審査委員会が実施された。審査委員会は11月19日、12月11日、1月22日の計3回開かれ、厳正な審査が行なわれた。

審査委員会では、着眼点の独創性、論述の実証性、議論の緻密さ、先行研究への誠実な配慮、フランス語原典の読解力を含む言語運用能力の高さ、研究者としての将来性など、多角的な側面において優れていると評価された。今後さらなる研鑽が待たれることは言を俟たないが、学位論文にふさわしく全般において高水準を維持した労作であることが確認された。

博士学位論文
内容の要旨および審査結果の要旨
第12号

平成26(2014)年4月25日発行

発行 聖心女子大学大学院
編集 聖心女子大学大学院
〒150-8938
東京都渋谷区広尾4-3-1
電話 03-3407-5811(代表)